

2009/12/19

A. ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』IV

抽象的システムと親密な関係性の変容

抽象的システムに対する信頼は、時空間の拡大化の条件であり、日々の生活に対する安心感の条件である。抽象的システムと結びついた型にはまった行いは、近代における存在論的安心感にとって不可欠なものである。しかし、抽象的システムに対する信頼は、人格に対する信頼と同じようなかたちで心理的報酬をもたらすわけではない。

- ・抽象的システムがもたらす安心感の例…飛行機を使った旅行

信頼と対人関係

○抽象的システムに対する信頼／人格に対する信頼

抽象的システムに対する信頼は、非人格的なものであり、対人的な信頼関係のもたらす関係の相互性や親密な関係をもたらすことができない。システムに対する信頼感と人格に対する信頼を橋渡しするのがアクセス・ポイントの担当者。

○親密な関係性の変容に対する捉え方

【社会学の既存の説明】「伝統的秩序の共同体的特質」と「近代的社会の非人格性」の対比

・[テンニース]

ゲマインシャフト（人間が生まれついてもつ直接的な人間の結びつき。家族や地域社会が典型）

ゲゼルシャフト（自由意思によって結ばれた契約的な関係。大都市、企業が典型）

・[ピーター・バーガー、ユルゲン・ハーバーマス]

モダニティの発達を、旧来型の「共同体」を崩壊させ、近代社会における人間関係を損なうものとして描く

・[クロード・フィッシャー]近代都市が、あらたな共同体的生活を生み出すとする

【ギデンズの考え方】

「共同体」という概念に含まれる区別すべき構成要素

①従来の共同体組織や親族関係 ②個人的に親密な関係（友人関係）、親密な性的関係

①一定の場所に緊密な関係性が埋め込まれているという意味での「共同体」は、かなりの程度まで崩壊している。（例…寄せ集めのような風景、親族関係の役割低下）

②個人的に親密な関係（友人関係）の変化

前近代…友人関係は制度化されており、リスクにみちた企て（経済的関係の拡大や従軍）に従事する際に持ち出されることが多かった。名誉や誠実さに基づく。友人の対義語は「敵」。 ※共同体、親族関係、友人関係など、制度化された人格的な結びつきは、人格に対する信頼に焦点を置くわけではない。

近代…友人関係は再埋め込みの様式。対義語は「知り合い」「自分の知らない人」。個人的な親愛感情に基づき、相手が善意に満ちた存在であることを要求する。 ※人格に対する信頼に基づく。

A. ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』IV

信頼と人格的アイデンティティ

○「抽象的システムの非人格性」と「私生活の親密な関係性」の関わり

・抽象的システムの発達、人格的つながりを消去するわけではなく、人格的つながりを**変容**させる。

・グローバル化が進む近代において、私生活と脱埋め込みメカニズムの結びつきは強まっている
(例・「一杯のコーヒーの中には、西欧帝国主義のたどってきた歴史が丸ごと入っている」)

⇒信頼をもたらす規範は存在しない。信頼は実証可能な誠意や率直さによって「勝ち取る」ものになる。

=信頼は相互の《自己開示過程》を要求する。《自己開示》するためには、自己探求が必要であり、自分自身の発見はモダニティの有する再帰性と直接結びついた達成課題になる。

ロマンティック・ラヴ (ストーン)

「自分が全ての面で一体化できる人間はこの世にひとりしかいない、という観念」

段階的に進む相互発見を伴い、愛情を抱いた人間の側の自己実現は、愛する相手との親密な関係性の増大と同じくらい重要な経験になる。

○親密な関係性の変容・まとめ

①モダニティの《グローバル化傾向》と《ローカル化した出来事》との不可分な関係

②モダニティの要素である《再帰的達成課題》としての自己の構築。自分のアイデンティティを、抽象的システムが提供する方法と選択肢のなかから見つけ出す。

③《基本的信頼》(相手に心を開くことによるのみ達成できる)にもとづく自己実現を求める動因

④《相互の自己開示》に導かれた「関係性」としての性愛的絆の形成

⑤《自己達成にたいする関心》

近代世界のリスクと危険

モダニティの示すリスク

①《激しさ》を増したという意味での《グローバル化》 (例・核戦争)

②地球上の人々に影響を及ぼす《偶発的事件の増加》という意味での《グローバル化》
(例・地球規模での分業体制)

※脱埋め込みメカニズムの下では、不測の事態に際して、資源やサービスをローカルに統制することができない

③人間の知識が自然界を変容→《社会化された自然環境》に由来するリスク

(例・原子力発電所事故、化学物質による海洋汚染、地球温暖化…)

④規範によって是認された活動が生む《制度化されたリスク環境》

(例・投資市場、ギャンブル)

⑤リスクの《リスクとしての認知》 ※前近代の宗教や呪術は、リスクに伴う不確実性を封印

⑥《広く流布したリスク認知》 ※リスクに対する感覚の麻痺を引き起こす

⑦《専門家知識のもつ限界を認知》

一般の人びとが近代のリスク環境を広く認識するようになった結果、専門家知識のもつ限界に気づくようになる。

リスクの全体像を専門家自身が認識していないこともある。

2009/12/19

A. ギデンズ『近代とはいかなる時代か?』IV

リスクと存在論的安心

○一連のリスクが専門化システムに対する信頼や存在論的安心感に及ぼす影響

・地球規模の重大なリスクと共に生きていかざるを得ない。リスクを統制する責任を誰も負っていない。

⇒このような危険性を絶えず心にとどめて置くことは不可能。

⇒前近代的な「運命」(=自分の統制の及ばない遠方の出来事に対する、漠然とした信頼感)意識が再び出現

・リスクの「非現実性」

リスクがもたらす帰結は、リスクが現実化するまで確定することができない

→リスクに対する感覚麻痺

適応反応

リスクに対する適応反応

①実利的受容

外部世界に対して、当座得られる利益だけを求めて参加する。日常生活への専念。

※②、③とも両立できる

②一貫したオプティミズム

理性の信仰。合理的思考(特に科学)により、地球規模の問題に対して社会的、技術的解決策を見出すことができるとする見地。※一般の人々にとって受け入れられやすい

③冷笑的ペシミズム

リスクがもたらす不安感に巻き込まれているのを当然だと考える。

・ペシミズム:自分がなにをやってもうまくいかないという確信。

・冷笑的態度:不安に対し、おどけた反応や厭世的な反応を示すことで、不安感が情緒面に及ぼす影響力をそぐための様式。

④徹底的な社会参加

危険の源泉に対する実質的な異議申し立て。社会運動。

モダニティの現象学

○近代世界のイメージ

【ウェーバー】官僚制的合理性の束縛が強化され、人々の行為を固定化していく

【マルクス】モダニティ=怪物(統制は可能)。資本主義は、人間の欲求を統制したかたちで充足させていく代わりに、市場の気まぐれな気分託していくために非理性的である

【ギデンズ】ジャガノート=人類がある程度まで乗りこなすことはできるが、突然操縦が効かなくなる恐れもあり、みずからバラバラに解体しかねない、巨大出力エンジンを装備して疾走する車。モダニティを完全に統制することはできない。

Juggernaut: 1[ヒンドゥー教]ジャガノート、2絶対的な力。巨大な破壊力、不可抗力、3[英]大型トラック 『ジーニアス英和大辞典』より

○モダニティの現象学を素描する枠組み

《**転移と再埋め込み**》

転移…グローバル化した文化環境や情報環境の中に送られること。親しい感情と場所が結びつきを持たず、空間的な隔たりを超えて地球規模で経験を「共有」する。

(例・新聞のニュース、テレビ番組、電話)

再埋め込み…社会関係や情報交換が特定の時間的・空間的脈絡から切り離されるのと同時に、社会関係と情報交換の再挿入の機会を新たにもたらす。(例・交通手段の進化)

《**親密な関係性と非人格性**》

・近代において親密な関係性は、距離を隔てても維持できるし、面識のなかった相手との間に絶えず作り出されていく←抽象的システムを利用

・近代的形態の親密な関係性において、信頼は常に両面価値的で、関係断絶の可能性が常に存在する。信頼関係が想定する、相手に「心を開くこと」の要求は安心感と不安感を持ち合わせる。親密な絆で結ばれていた恋人は、突然再び非人格的な他人に戻っていく。

《**専門家知識と再専有**》

《**私生活中心主義と社会参加**》

事項参照

日常生活における脱熟練化と再熟練化

○専門家知識とその再専有

今日の極めて複雑な知識体系のごくわずかな領域においてしか、完全な専門家にはなれない。近代においても、ものごとは、前近代と違う意味で《不透明》



専門的知識を一般の人々が再専有し、日々の生活の中で決まりきったかたちで充当利用していく過程が存在する。とりわけアクセス・ポイントでの経験が影響。

○私生活中心主義と社会参加

・個人の生活に影響を及ぼす抽象的システムに対し、実利的受容のみを行うことは不可能である。専門家システムは完全ではなく、リスクに対して確信を与えることはできないし、専門的知識そのものが変遷する。

・近代国民国家の政治体制には、積極的社会参加の機会が多数存在しており、私生活中心主義よりもむしろ積極的行動主義を引き起こす。

ポスト・モダニティ論にたいする反論

ポスト・モダニティではなく、「モダニティの徹底化」(ハイ・モダニティ)として考える

→P.187 表